

林業大学校に入学し、丸四ヶ月が過ぎた。その当初、森林組合の作業員等、民間の現場職を卒業後の進路と考えていたが、学校での講義において、林業全体の構造について学ぶ中、林業とは、木を育て、伐採し、販売する、という単純な流れだけではなく、治山事業や保全事業、近年では広報活動といった、非常に重要な縁の下の活動が多々あることを知った。それに加え、ここ数年の林野庁の楽観的ともとれる予測とは裏腹に、変わらず厳しい現状が続いていると感じられることより、林業界の環境を変えることができる可能性のある、行政機関に興味を持った。幅広い業務をこなし、尚且つ様々な制度に明るいという両の希望に沿うことから、今回、木曾森林管理署での体験研修に参加させていただいた。

五日間に渡り、広報活動、伐採事業、治山事業、保育事業、路網整備と、様々な視点から、林野について、学ぶことができた。

広報活動としては、教職員を対象として管轄内の国有林の案内する催しと、高校生に向けた伐採体験に同行した。これらは、インストラクターの方を始め、各方面への連絡と調整、作業に使われる道具類の整備など、事前の準備や企画が大変であるものの、森林への意識を高め、林業の裾野を広めるための重要な活動である。

伐採事業の現場では、実際に作業を行う民間事業者との密な連絡のやりとりによって、それぞれの役目を最大限に果たせるための、様々な努力が行われていることを知ることができた。

林道敷設作業を直に見ることで、自然という予想外の問題が頻繁に起こり得る現場においても、経験や知識によって、それらを時に回避し、時にそのまま利用することで作業を進めていた。こうした建設に困難が伴う路網システムであるが、後々の効率面や安全面を考慮した上では非常に重要な存在であり、山林を整備する中での大きな柱の一つとなっている。

木曾森林管理署の管内では、過去に御嶽崩れ呼ばれる、大規模な災害が起こっており、その復旧事業のため、大規模な治水、治山事業が行われ続けてきた。その現場を実際に見学することで、短期、中長期的の、二つの視点からの活動の違いと役目を学んだ。

保育のための調査では、獣による被害を目の当たりにした。これらへの対策は後手に回さざる得ない状況で、改善策が検討されているという。

今回の研修により、公的機関の担う役割の大きさを実感し、それぞれの活動から、今まで意識に上ることのなかった問題を含め、様々なことを新たに考える機会となった。